



# 奈良県感染症発生動向調査還元情報（週報）

奈良県感染症情報センター  
(奈良県保健環境研究センター内)  
**Nara IDSC**



## 今週の概要

■ 今週の感染症情報

■ 気になる話題 ～動物からうつる身近な感染症について⑦～ **NEW**



(調査週) 平成 23 年 第 43 週 10 月 24 日 (月) ～ 10 月 30 日 (日)

奈良県および二次医療圏別発生状況 (奈良県上位 5 疾患) (5 週前からの動向)

順位	疾患	定点当たり	奈良県	北 部	中 部	南 部
1	感染性胃腸炎	1.77	→～↑	→～↑	→	→
2	A 群溶連菌咽頭炎	1.20	↑↑	↑↑	↑↑	↑↑
3	手足口病	0.94	→～↓	→	→～↓	↓
4	水 痘	0.51	→	→～↑	→	→～↑
5	RS ウイルス感染症	0.40	→～↓	↓	→～↓	↑↑

全県の動きと目立って異なる推移（定点当たりの変化程度で実数ではない）を太い矢印で示す。

**県北部地区概況** 報告数は 101 例で、前週報告の 76 例から増加。上位 5 疾患は、①感染性胃腸炎、②手足口病、③A 群溶連菌咽頭炎、④水痘、⑤RS ウイルス感染症＝流行性耳下腺炎の順。手足口病の報告数（16→11→21 例）は、再度増加。A 群溶連菌咽頭炎の報告数（15 例）も、増加。感染性胃腸炎の報告数（29 例）は、やや増加。水痘の報告数（9 例）も、やや増加。流行性耳下腺炎の報告数（6 例）は、ほぼ横ばい。RS ウイルス感染症の報告数（6 例）は、横ばい。郡山 HC 管内基幹定点から、マイコプラズマ肺炎が 1 例報告された。奈良市 HC および郡山 HC 両管内眼科定点からの報告はなかった。（村井 記）

**県中部地区概況** 報告数は 42 週の 87 例から、43 週は 84 例と横ばいであった。上位の 5 疾患（42 週→43 週）は、①感染性胃腸炎（25 例→30 例）、②A 群溶連菌咽頭炎（11 例→15 例）、③手足口病（18 例→11 例）、④水痘（10 例→7 例）、⑤流行性耳下腺炎（1 例→6 例）の順であった。感染性胃腸炎はやや増加し 1 位、A 群溶連菌咽頭炎は増加し 2 位に、手足口病はやや減少し 3 位となった。RS ウイルス感染症は減少し 8 位（7 例→4 例）となった。インフルエンザの報告はなかった。基幹定点からは葛城 HC よりマイコプラズマ肺炎 1 例の報告があった。眼科定点からの報告はなかった。（徳田 記）

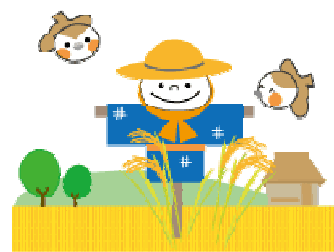
**県南部地区概況** 報告数(第42週→第43週)は11例→25例と増加。報告のあった疾患は①A群溶連菌咽頭炎(6例→12例)、②RSウイルス感染症(0例→4例)、③感染性胃腸炎(2例→3例)、④水痘(2例→2例)、⑤手足口病(0例→1例)、⑤突発性発疹(1例→1例)、⑤流行性耳下腺炎(0例→1例)、⑤無菌性髄膜炎【基幹定点】(0例→1例)。なお、無菌性髄膜炎は年齢区分[10-14歳]の症例であった。(柳生 記)

## 【気になる話題 ～動物からうつる身近な感染症について⑦～】

### 〈野生動物からうつる病気〉

都市化が進んだ昨今では、野生動物と接触する機会が少なくなりました。でも、油断しているとアウトドア活動や海外旅行で野生動物から病気に感染する危険性があります。

日本では、むかしから秋の収穫期に田畑で農作業をした後、高熱が出る病気が知られ、秋疫(あきやみ)、用水熱、七日熱(なぬかやみ)、伊万里熱、土佐熱、天竜熱などの俗称で呼ばれていました。これらは**レプトスピラ症(ワイル病)**によるもので、ネズミをはじめとする野生動物が保菌しているスピロヘータを尿中に排出し、それが素手素足による農作業で感染したと考えられます。治療には抗菌薬がもちいられます。



**エキノコックス症**は、エキノコックスという寄生虫(条虫)によるものです。この条虫は主にキツネやオオカミ、タヌキなどのイヌ科動物に寄生し、糞便に排出された虫卵が飲み水や食べ物に混入することでヒトに感染します。日本では、北海道が主な感染地域となっていますが、20世紀はじめにネズミ駆除目的で礼文島に移入したキツネから広まったと考えられています。治療法は、外科的に切除する以外にありません。生水は飲まない、野菜はよく洗って加熱する、といった予防が何よりも重要です。



**狂犬病**は、日本ではペットの予防接種が徹底されているため過去のものと思われていますが、世界の各地で感染・発症事例が報告されています。ウイルスが原因で、イヌだけでなくコウモリ、アライグマ、スカンクなど多くの野生動物からうつる危険性があります。もし、狂犬病発生地域で野生動物に咬まれたら、必ず医療機関を受診して発症前に適切な処置を受けることが大切です。発症すると、助かる見込みはないのですから。

予防策として、アウトドアでは肌を露出しない、生水を飲まないことを心がけてください。また、海外旅行の前には、検疫所やトラベルクリニックに相談するとよいでしょう。

(感染症情報センター 記)